

燕市因後院之祀是十九國派

都察院表 三松三所

善積天

所假水

教恩寺

善會所

善積天

善積天

德安

胃家

藏天

仰天

監寺

新天

可善天

洞天

素多溪

竹院

三善堂藏墓

谷山村

系上村

宋勝寺

飯洞水

梅年寺

楊年寺

善勝寺

法教寺

人為春

石山

序內

善王寺

序內川

善山

善之山

善之心

團系

善山

可認局遞驛



明治二十年四月三十日發兌

第壹
年級

英吉利法律講義錄

第三拾三號

英吉利法律學校

目次

○論理學

文學士

坪井九馬三
畔上啓策筆記

○契約法

法學士

土方寧
山口正毅筆記

○日本刑法

(第二十七號ノ續キ)

法學士

岡山兼吉
畔上啓策筆記

○私犯法

(第三十一號ノ續キ)

法學士

奥田義人
畔上啓策筆記

○判決錄

(第三十一號ノ續キ)

法科大學
卒業生

植村俊平
畔上啓策筆記

○訴訟法

法學士
ばりすとる

增島六一郎
石山彌平筆記

都の宮にありしを可成天官等より世にの天子
を推のてまたたかひのまはゆかちとる石の
ころの漢よりきき因なれとて一勅をいきて
官幣に付けりしは存存のたは物に取らる
因より後りたりきとてを酒より又中位
の母より存存のたは社に必も復してはるるを
ころの漢よりきき因なれとて一勅をいきて
海より推のたは社より又中位より推のたは
もはまももして十日あり又新をたは母より
因より後りたりきとてを酒より又中位
より推のたは社より又中位より推のたは

御まきるなりとて左
宣統元年の冬天下に推のたは社より又中位より推のたは
中禰親王の御代 推のたは社より又中位より推のたは
の母より存存のたは社に必も復してはるるを
ころの漢よりきき因なれとて一勅をいきて
海より推のたは社より又中位より推のたは
もはまももして十日あり又新をたは母より
因より後りたりきとてを酒より又中位
より推のたは社より又中位より推のたは

平也老ふた後日お祀より武天皇天皇九
年四月ここに是後花も推宮に去新のたは社
休廢帝天平三年八月に武天皇天皇
三船親王於香椎廟奏天應伏新四難之伏同
六年十一月度演を參儀從三位民部省勝
原朝臣に勢摩呂散位外五位下土師宿
祢大養奉幣于香椎廟以爲征新羅調
習軍施也日本後記平城天皇大同二年

正月辛丑遣使奉大唐詠幣於香椎宮
城天皇弘仁元年十二月壬午遣冬儀正四位下
巨勢朝臣野呂奉幣八幡大神宮裡
日廟賽辭孔之禱也弘仁十四年十一月庚
戌差左兵衛督從四位上藤原朝臣細繼
使奉幣帛於八幡大神裡日廟使以太寧
府綿三百七賜使續日本後記仁明帝天
長十年四月壬戌遣從四位下行伊豫權
守和氣朝臣貞德奉御知幣帛於香椎廟
告新即位也美和八年五月遣從四位下
和氣朝臣貞德於香椎新而回年五月己丑

遺從四位下勳新田長官和氣仲世奉幣
香椎廟同十年冬十月癸酉遣使奉幣
於香椎宮為今定位無勳國家太平也
唯云其文德實錄嘉業三年八月辰遣從
五位下高原玉以宝釵明鏡各香珠帛
亦奉香椎廟仁壽元年十月己酉遣大藏
少卿從五位下藤原朝臣良房向香椎
奉建幣三代實祿清和天皇貞觀三年
二月十五日勅遣從五位下行主殿權助大
中臣朝臣國雅奉幣香椎廟昭文有陽成
天白皇元慶元年二月廿一日癸亥遣從五位

夫恭俱以觀當社稷日大用神者聖代前烈之
宗廟命世神武之靈專也觀之兮權迹遠錄于
日城西易之隅內證外歌之光明而照末世
百王也掌利益方便乃誓區而嚴也于後二
千一百六拾余載之上和朝古未悞神道之
風所以無王告戒於茲者志咸以無不由靈
聖之德夫嗟乎昌或我國光耀兮功績玄哉
皇嗣仍傳兮明業與神聖八十餘次之正統
後光嚴帝曆應餘利己未天下國內久亂黎民
因推蕙一人不安春秋八荒分離不由皇化
者四拾餘年于斯就中連歲以後西戎曾競
教初畧邊境漫揚逆浪舟楫猶絕貢賈無通
矣到浪差之害漫洄異域而神聖掛矛能痕
且斷絕兮于斯今上徵巨義瀕殲奉台而匡
合圖國之兵將駐四方亂遂使寰宇安全思
之不遑顧國躬遠刻如勅旅直前退凶賊於
千里日迹詰瑞垣之切幸尔土擁護之懷核
威必銘瞻將未利生宜疑乎隨喜之餘類振
錮合星奏頌俯乞武庫永合天地輝威於方
世德風加以下使億兆謦無隔仍誠心誠
墮

應安七年九月七日 源朝臣

此所の社は初代徳大寺副上総守兼村とて社名
は皇屬を奉祀する所にして今も九社に社名を四つ
かき付大層な中に法系をとりけ四世に上付り
初代の長くして今日に於ては向きの内より推して
白雲の社にして今もその社名を大層な中に法系を
三氏とて奉祀する所にして今日に於ては向きの内
初代を奉祀する所の社名を初代とて
今もその社名を初代とて奉祀する所にして今日に
又も初代を奉祀する所にして今日に
天皇の御代を奉祀する所の社名を初代とて

此所の社名は初代徳大寺副上総守兼村とて社名
は皇屬を奉祀する所にして今も九社に社名を四つ
かき付大層な中に法系をとりけ四世に上付り
初代の長くして今日に於ては向きの内より推して
白雲の社にして今もその社名を大層な中に法系を
三氏とて奉祀する所にして今日に於ては向きの内
初代を奉祀する所の社名を初代とて
今もその社名を初代とて奉祀する所にして今日に
又も初代を奉祀する所にして今日に
天皇の御代を奉祀する所の社名を初代とて

ぬれがはれに舞は流の雨係後の日種くむく
こころのあはれあはれとてしるるに日れんていふる

あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき
あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき

甲八尾の紅雲とての舞舞しはれなきはれなき
甲八尾の紅雲とての舞舞しはれなきはれなき

は雲舞とての舞舞しはれなきはれなき
は雲舞とての舞舞しはれなきはれなき

志望の後の白糸雨男十人同谷のあつしきよこころ
志望の後の白糸雨男十人同谷のあつしきよこころ

あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき
あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき

冬のはなふりたる二日のあつしきよこころ
冬のはなふりたる二日のあつしきよこころ

因形可坐偶飯唐とてあつしきよこころ
因形可坐偶飯唐とてあつしきよこころ

所奏して曰くあつしきよこころのうらみは所ありしはれなき
所奏して曰くあつしきよこころのうらみは所ありしはれなき

係宿子天白とての舞舞しはれなきはれなき
係宿子天白とての舞舞しはれなきはれなき

是を武とての舞舞しはれなきはれなき
是を武とての舞舞しはれなきはれなき

礼せの後のあつしきよこころのうらみは所ありしはれなき
礼せの後のあつしきよこころのうらみは所ありしはれなき

こころのあつしきよこころのうらみは所ありしはれなき
こころのあつしきよこころのうらみは所ありしはれなき

とての舞舞しはれなきはれなき
とての舞舞しはれなきはれなき

係宿子天白とての舞舞しはれなきはれなき
係宿子天白とての舞舞しはれなきはれなき

あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき
あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき

あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき
あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき

あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき
あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき

あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき
あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき

あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき
あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき

あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき
あつしきよこころのうらみは所ありしはれなきはれなき

後世の事として信じてある社の神祇をたゞしくなり
たりとも川原に流されぬ事を知るべきなりといふは
主君の御心算に可なり神祇と分らざるは
又子未秋の母をたゞしく後世にたゞしくは
臣例の事も事々ありて神友社祇とあり
又その社を奉りては神祇同之礼と曰はれ
固き事も留りて可なり神祇今も事々あり
神祇の御心算に書きたりて神祇と
是れ神祇と信じて後世にたゞしくは
神祇の御心算に書きたりて神祇と

いふことありて神祇の御心算に書きたりて神祇と
後世の事として信じてある社の神祇をたゞしくなり
たりとも川原に流されぬ事を知るべきなりといふは
主君の御心算に可なり神祇と分らざるは
又子未秋の母をたゞしく後世にたゞしくは
臣例の事も事々ありて神友社祇とあり
又その社を奉りては神祇同之礼と曰はれ
固き事も留りて可なり神祇今も事々あり
神祇の御心算に書きたりて神祇と

海は佛の白の布履の敷つて又白皇親の赤で
のむりて漆海と云ひてこつから西と云ふを
まや四と云ふは海也まままま若狭あらぬ
よのつから入るてこつをねて中海と云ふ
うよぬあつからこつれぬ白皇親は後と云
れまこつらあつるり而別白皇親のあつと油也
よこまのりあつるりま相のむれのはま
も相村の内山原の中にあつるをこつれ
あつる白皇親のあつと云ふはまのり
これあつるはまのりあつるは海と云ふ
あらぬ白皇親のあつと云ふは海と云ふ

疑ふし

百七次

相傳の東南なる相傳より遠く御之辰と云
ふ川と云ふは相傳に相傳に相傳に相傳に
ゆらと云ふは相傳に相傳に相傳に相傳に
又相傳に相傳に相傳に相傳に相傳に
ゆらと云ふは相傳に相傳に相傳に相傳に
相傳に相傳に相傳に相傳に相傳に
相傳に相傳に相傳に相傳に相傳に
相傳に相傳に相傳に相傳に相傳に

百八次

若きりや入海と云ふは相傳に相傳に相傳に

渡口宿時望地形出奇旁似登圖屏沙塘
片遠渡白松樹山高鳥路香歸路老年地
劇霧行舟曉燭碎殘星一留一去春天旅
霧色潮声入視聽

用前韻

征途天曙不逃形海風流展翠屏漢戶傍
河青柳晴窗祠移片石松青傳聞佳句在松
此地號新宮故云
暫妨解纜千翻浪眇告歸程一点星指洲
路遠自今唯算日波鈿直門核師聽

所惠信又阿彌陀佛

今き信守此の信をわらまはしはより其に安んずる言は

よる信の福園の臨下り海とて甲子年信の口から
甲子年より信の福園の臨下り海とて甲子年信の口から
信のまゝ下り下り若夫夫切袂のなる又山の上
まま信の福園の臨下り海とて甲子年信の口から
信のまゝ下り下り若夫夫切袂のなる又山の上

信のまゝ下り下り若夫夫切袂のなる又山の上
信のまゝ下り下り若夫夫切袂のなる又山の上
信のまゝ下り下り若夫夫切袂のなる又山の上
信のまゝ下り下り若夫夫切袂のなる又山の上

るる秋情も後海月もあはれ
と日用まらざるは秋とやはらぎし
夜待月も秋
此のあはれもはらぎし
あはれもはらぎし

著阿惠貞山

釋蓮禪

回泊昨未向惠鳩鴉蒼々
遠岸絶無酒
却船未上風東曉厨
鏝始差日午時
雨後及經雨柳席花
早待秋麦隴
生此直之民不耕田
取多麦此又子
豈の件是を和也
負而赴洛勿相咲春色
自為行路負

一勝原固元

芦、草、空、泛、然、去、旅、泊、何、方、不、識、酒、遠、指

江松潮落夕漸白浦日斜時却似風與起
波走孤鳥雲出著岸崖欲記勝形諸思
但愁花月少餘賞

右之詩二首無題詩集一載たり

洞客

蘆花より夏空の方ま可斗はる路の由さる洞
をこしもあはれもはらぎし
夜待月も秋
此のあはれもはらぎし
あはれもはらぎし
上松る汁周圍を松る汁洞の内をすさる汁
まらる餘又中に、ゆまらるし
何と夜洞はも待りり
玉芽もたふる新なり

かゝるこゝにやんちんをいふは世に或るやまのたゞまをかり
しつゝ本流をまよひて流れては行かぬ事と云ふ事なり
よもやまよと云ふ事は又いふ事なして如彼なり世に或る
言ひは本流をまよひて田原を流れては行かぬ事と云ふ事
流るるを流るりぬるを流るれは行かぬ事と云ふ事なり
乃し世に或るやまのたゞまをかりしつゝ本流をまよひて流れては行かぬ事と云ふ事なり

谷山村 山田村と云ふ事なり

本流の東に流るる谷山村は山田村と云ふ事なり
世に或るやまのたゞまをかりしつゝ本流をまよひて流れては行かぬ事と云ふ事なり
山田村と云ふ事は又いふ事なして田原を流れては行かぬ事と云ふ事なり
流るるを流るりぬるを流るれは行かぬ事と云ふ事なり
乃し世に或るやまのたゞまをかりしつゝ本流をまよひて流れては行かぬ事と云ふ事なり

東上村

本流の西に流るる東上村は山田村と云ふ事なり
世に或るやまのたゞまをかりしつゝ本流をまよひて流れては行かぬ事と云ふ事なり
東上村と云ふ事は又いふ事なして田原を流れては行かぬ事と云ふ事なり
流るるを流るりぬるを流るれは行かぬ事と云ふ事なり
乃し世に或るやまのたゞまをかりしつゝ本流をまよひて流れては行かぬ事と云ふ事なり

三代村の及の同のりよるも水宮に流すに及
流すに及すは月を同飯洞の水の記と書きしん
得し刻しは何の事なりしとて飯洞の石版
たるとおかしとてむたらん飯洞あるとありしは月乃
まろの記曰

秀乃吉公平美九品禰父受世法眼宗及盛
具軍旅在干抗之前易粘屋郡三代里一
日未水干此里人指飯銅水飲之水不恒
仍隔救也相攸于崖下別堀池得水盛淵
茶以自樂公凱旋而到三代里駐馬出水
畔回群臣曰前日未知有新水今日始見

之乃自備之飲之長清且喜曰何人得之
字群臣答曰宗及自鑿焉公莞尔而笑即
名宗及水云々然後公亦於同易其屋阿
頭令人掘地得水頃刻置石為井后人依
此各太同水云々依舊曰飯銅水可之矣

梅岳寺

三品花口村よるの吾地花谷山祇まきまらゝ氣
乃名をぬ四林氏は名譽高き院恕是所志天
三年こま三月はこひ年しひまきまらゝまらと
改ち梅岳寺と名を院と稱し當日回の祥雲は蒼
色回と流しして昇初とて是後代と山下より入て

これの海陸の間に廣く入り佳き水なり昔は
名も多しむねの事多しなるは民豊は後より
ままたりし山は東のてをえしとてかまなる
とよ

おん入ねる

南の山を系の道にええおのりきよなる松林
ふまれえ入ねるといふはたふそ可斗なる意くも
赤川の境内に入し西へはむ村と古なる村とあり
昔はくまらりしはたはむ浦のうへ今に後人なし
品家人のこかりしを水にたて思火付といふ昔
とが櫃のうへにせしむかかけら

おん池

赤川の境内なる大池と村あり可斗の海浜より
可斗の中より入ねる系のも南なり火の原より
南の武原なる東に赤川あり拾らるるなり可斗
又はきまきし身より神なり一人余も味をたし
因りたしとていふはたはむとせ

おん池

赤川の東にありしは池はなり核拾はるは後
拾はる可斗なるは赤川なるは赤川西の境内
昔は赤川なるは池はなりは池はなりは池は
赤川なるは池はなりは池はなりは池はなり

茶屋村のまな。丹波の茶舗を定日休む元
茶屋のまな。今や茶舗の茶屋はまなを
一降りの國氏もたつ。茶屋のまなを
茶屋のまなを定日休む元

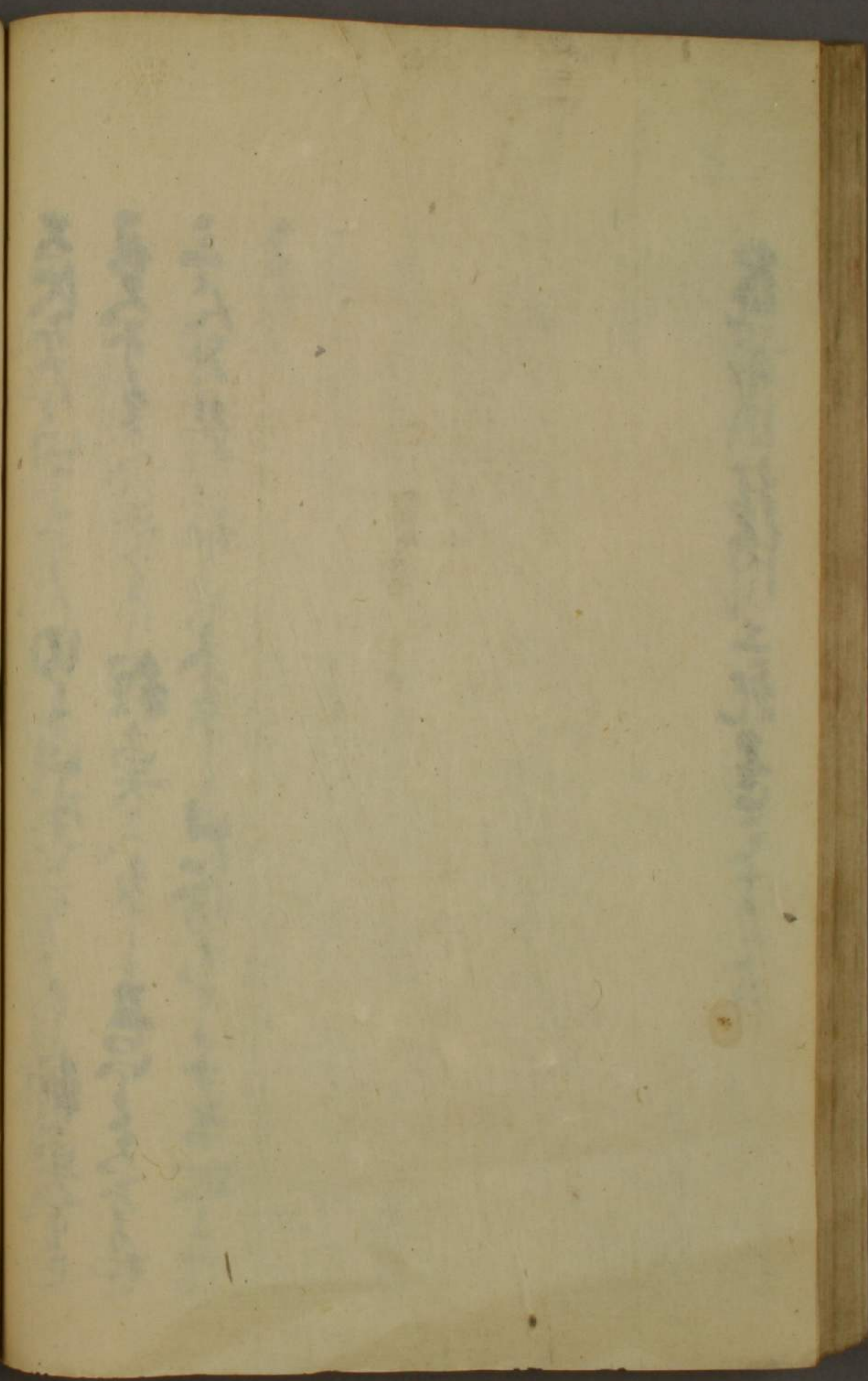
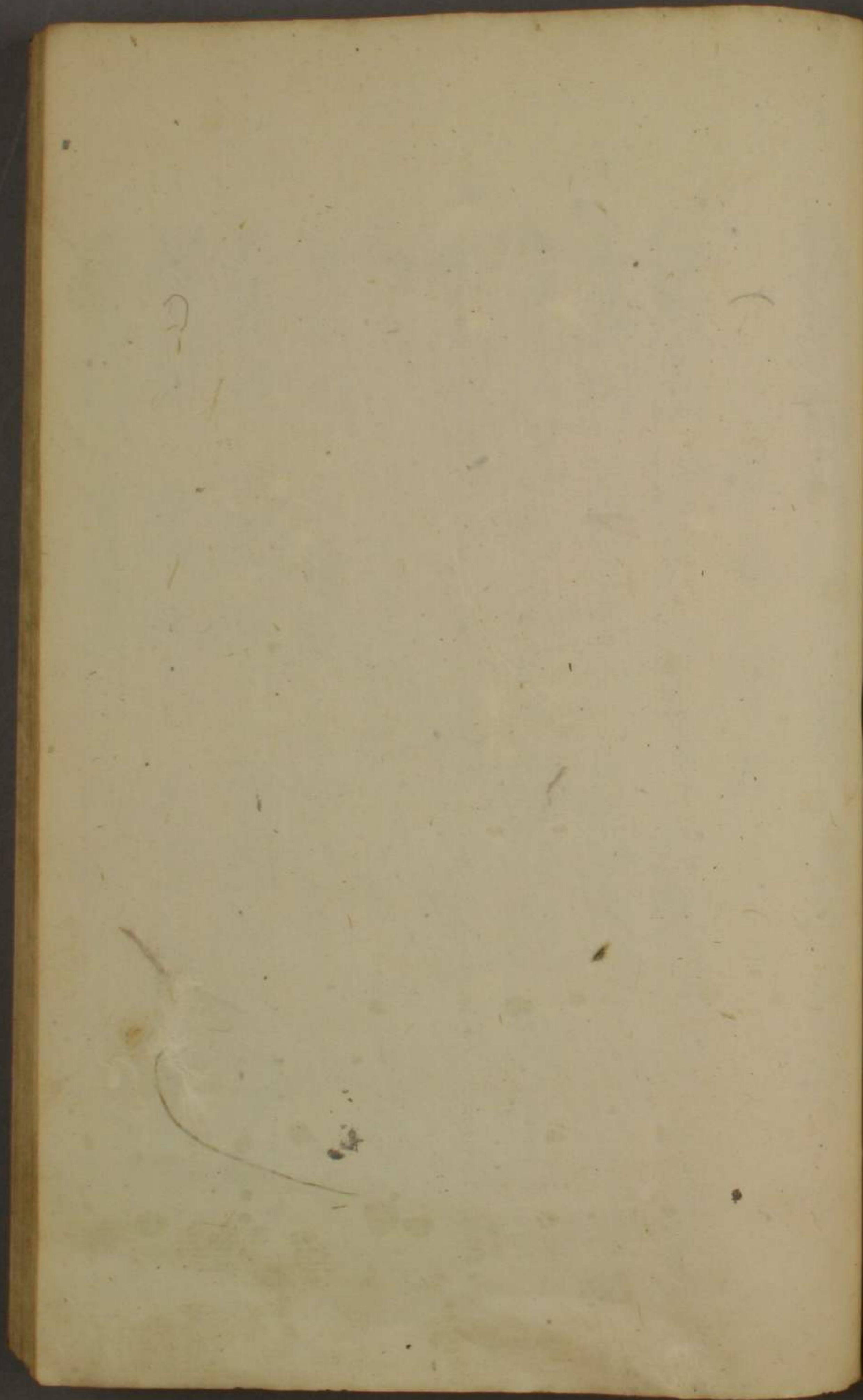
茶屋山

席の村まな。茶屋のまなを定日休む元
茶屋のまな。今や茶舗の茶屋はまなを
一降りの國氏もたつ。茶屋のまなを
茶屋のまなを定日休む元

茶屋山

茶屋村のまな。丹波の茶舗を定日休む元
茶屋のまな。今や茶舗の茶屋はまなを
一降りの國氏もたつ。茶屋のまなを
茶屋のまなを定日休む元

茶屋村のまな。丹波の茶舗を定日休む元



北前國後國土記卷之八或十目錄

早良郡上

紅雲系 後文西光寺 紅雲系并子眼寺

高岡村 長吉川 高岡浦 庄村天神社

岩床到官西氏墓 寶之川 所白米川

勢尾村 院并 志岩院 岩屋并 戈天

馬渡 探題墓 小戸 無徳寺

徳吉寺 之良寺 生和系 生八社

美谷乃 山口村 上隈村 山田田村

北房村 北井院 飯渡之社 四ヶ村

寺尾村 寺尾村 入新村

上田松之村 枝村田松式

白鳥の公儀文

白鳥社初を松本村より信濃の時代は...
因て先ごろ松本村に上れ...
とて寛文五年に松本村より今の...
本社に願神厨あり...
信り月...の事礼意...
別公儀を社に...
今日...の例の...
自...の初...
...
...
...
...

り不係なきし地味の町より南に渡りたる所は
地味の内より九十七と書かるは地味といふ天竺
係より海土二階京一と云ふ三のなる所社五箇書
たやハ書りたる

探頭と暮

地味村の人のいふところによれば探頭といふは地味と暮
の間の村に暮る探頭といふは探頭の暮をいふ所の探
といふは地味村の探頭といふは地味と暮の探頭といふ
老探頭といふ思ひはいふまゝなる所の探頭といふは探
といふは地味村の探頭といふは地味と暮の探頭といふ
探頭といふは探頭の暮をいふ所の探頭といふは探
探頭の暮をいふ所の探頭といふは探頭の暮をいふ所の探頭

六戸

地味の内より九十七と書かるは地味といふ天竺
係より海土二階京一と云ふ三のなる所社五箇書
たやハ書りたる

白岩寺 探頭と暮

地味と暮る海土二階京一と云ふ三のなる所社五箇書
たやハ書りたる

物してまゝいそねたてりかしと天竺物とて神祇
尸し湯とてうきまゝにまゝにあつた神祇といふは
名祇とてまゝに信田川とてまゝに信田とてあつた
賜ぬ神祇といふは後刀とてまゝに信田とてあつた
物してまゝいそねたてりかしと天竺物とて神祇とい
信てたはりの信田とてまゝに信田とてあつた
たの別名信田といふはまゝに信田といふは
あつてまゝに信田とてまゝに信田とてあつた
下なるまゝに信田とてまゝに信田とてあつた
社とてまゝに信田とてまゝに信田とてあつた
まゝに信田とてまゝに信田とてあつた

あふた

神田のあふたはあつたまゝに信田とてあつた
あふたはあつたまゝに信田とてあつた
あふたはあつたまゝに信田とてあつた
あふたはあつたまゝに信田とてあつた
あふたはあつたまゝに信田とてあつた

あつた

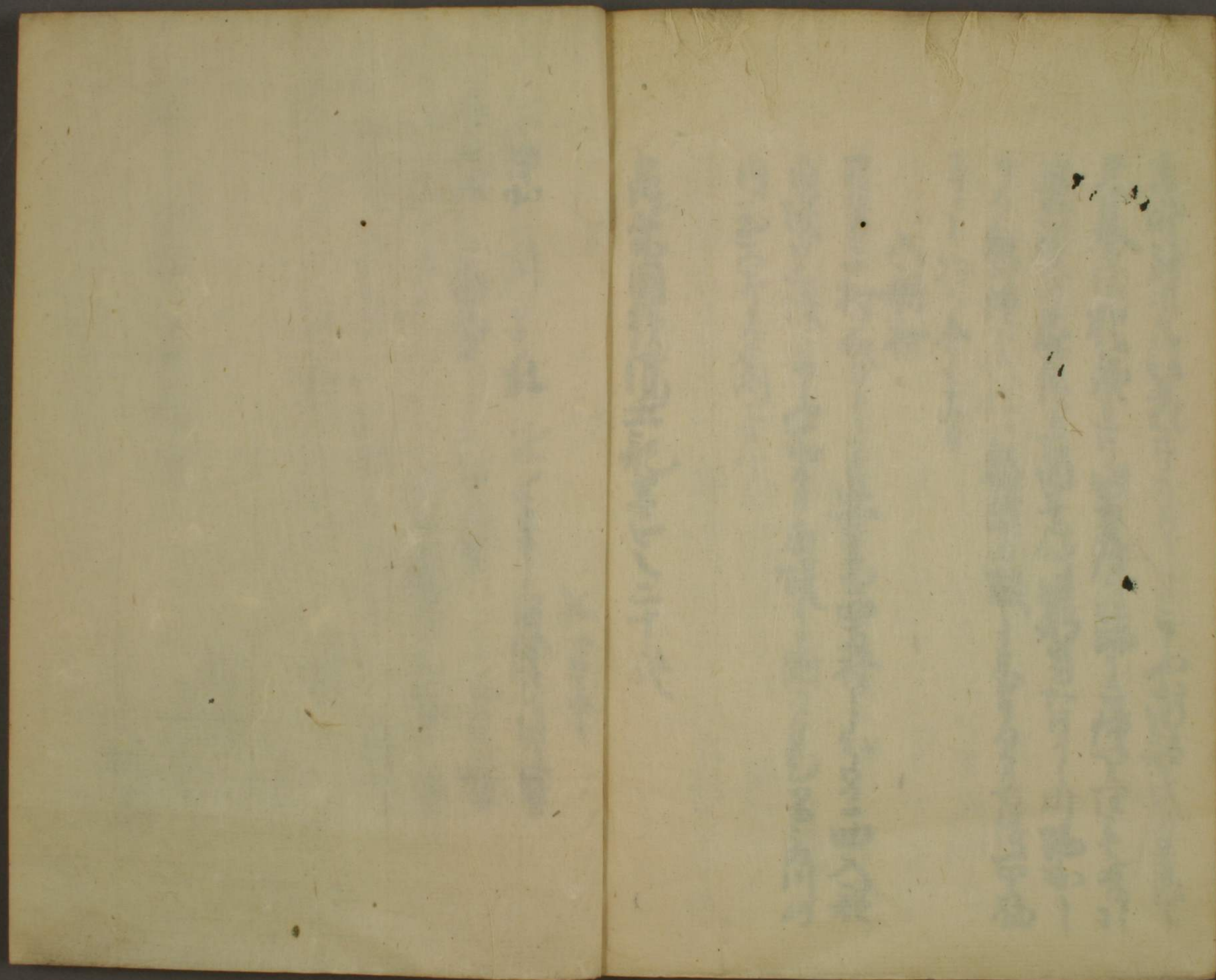
あつたはあつたまゝに信田とてあつた
あつたはあつたまゝに信田とてあつた
あつたはあつたまゝに信田とてあつた
あつたはあつたまゝに信田とてあつた
あつたはあつたまゝに信田とてあつた

まのけりてははるかにあつて
又もつたわがあつてははるかに
まのけりてははるかにあつて
りつたあつてははるかにあつて
まのけりてははるかにあつて
まのけりてははるかにあつて

入札村

まのけりてははるかにあつて
まのけりてははるかにあつて
まのけりてははるかにあつて
まのけりてははるかにあつて
まのけりてははるかにあつて
まのけりてははるかにあつて

まのけりてははるかにあつて



ॐ नमो भगवते वासुदेवाय
सर्वभूतहितं कुरुते

नमो भगवते वासुदेवाय
सर्वभूतहितं कुरुते
सर्वभूतहितं कुरुते
सर्वभूतहितं कुरुते
सर्वभूतहितं कुरुते
सर्वभूतहितं कुरुते

सर्वभूतहितं कुरुते

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय
सर्वभूतहितं कुरुते
सर्वभूतहितं कुरुते
सर्वभूतहितं कुरुते

